

## 王寺北義務教育学校視察

令和4年8月22日(月) 13:30~16:40

生駒南小・中学校の今後を考える会議参加者11名、  
教育委員会委員 7 名、  
教育委員会事務局職員 8 名が参加

- 校内視察
- 説明

1. 設置に至るまでの経緯
2. 施設一体型義務教育学校のメリット・デメリットについて

### 王寺北義務教育学校の特色

王寺北義務教育学校は、1人の校長と1つの教職員組織が置かれ、9年間の学校目標を設定し、系統性のある教育課程を編成、実施している。これまでの小学校を前期課程6年、中学校を後期課程3年として区分して、基本的には小学校・中学校の学習指導要領を準用している。さらに、教育課程を1年～4年生の前期(修得期)、5年～7年生の中期(充実期)、8年～9年生の後期(発展期)に分けた、4・3・2制を取り、小学校から中学校への円滑な連携・接続を図っている。

### メリット

- ・9年間の教育課程を4・3・2制、5・4制などの柔軟な学年段階の区切りを設定し、教育を進めていくことができる。
- ・教員が9年間を通して、子どもを育てる意識を持つことで組織的な学校運営が図ることができる。
- ・前期・後期の教職員、それぞれの指導方法の交流などを図り、協働して指導することで、授業改善、指導力の向上が図ることができる等、学校の組織力の向上が進められる。
- ・9年間の目標を定めて教科ごとに系統性を整理し、9年一貫したカリキュラムを編成することで、学びの連続性を確保できる。
- ・前期課程の教員による、きめこまやかな指導や後期課程の教員による専門性を生かした指導の良さを学年段階に応じて取り入れることで、子どもたちの学習意欲を高め、学習効果の向上が図れ、学力の向上につながる教育ができる。
- ・9年間を見通した生徒指導の確立、系統性のある、きめこまやかな生徒指導が行える。教育相談を系統的に行い、組織としての生徒指導の充実も図ることができる。
- ・特別支援教育において、児童生徒一人一人の障害や発達段階に応じた計画的な9年間の個別の教育支援計画、指導計画を作成し、小・中学校職員の共通理解の基で、9年間を見通した教育が行える。
- ・前期課程・後期課程の教職員が同じ教育目標で、義務教育9年間を一貫性のある指導を行うことにより教育の質の向上が図れる。
- ・一つの学校内で1年生から9年生までが学校生活を送るので、少子高齢化が進む中で異学年交流など子ども同士の交流を活発化させることで、より多くの教職員が子どもに関わることで、一人一人の状況に応じた教育の推進をしていくことができる。

- ・特色ある教育ができる。英語教育の推進、ふるさと王寺の理解と愛情を育む教育の推進、情報化への対応。

#### デメリット

- ・教職員の打合せの時間や研修時間の確保等教職員への負担感、多忙感に課題がある。
- ・王寺町の2つの義務教育学校も1学期、開校当初でいろいろな調整があり、先生方も時間の負担は大変であったと思う。

### 3. 開校後の学校の様子

- ・1年生～9年生の1027名、先生110名が活動している。子どもたちは、非常に落ち着いて学習に取り組んでいる。
- ・生徒は、新しい、今までにない環境で学習ができるので非常にワクワクしている。下級生には優しくしてあげたい、言葉使いに気を付けたい。と語っている。小さな子がいるので、優しい気持ちになれるのだと思うし、教師の方も身だしなみ等みんなの手本になるような指導をしていることもあって、学年が上がれば上がるほど落ち着いた中で生活していると印象を受けている。
- ・下級生は、後期課程の子たちに憧れを持ち、後期課程の子たちは、下級生に優しい気持ちで接してくれることが、日常生活でできることによって、人間性が深まっていくのではないかと思う。
- ・義務教育学校のメリットの1つ、異学年の交流については弾力的に取り組んでいる。
- ・教育相談、不登校、指導関係が充実している。様々な子どものニーズ、適切な支援が行える環境が整っている。教員も110名いるので、いろんな子どもたちに関わりができる。
- ・学力の向上、9年間を見通したカリキュラムを策定することができる。ゴールを設定できる。具体的な見通しを持てる。1年生から9年生まで系統的な学習を広げながら、専科の指導教員、中学校の専門的な指導を取り入れている。

#### ➤ 質疑応答

Q1:4・3・2制、前期・中期・後期に分けているのが一番の特色だと思うが、この校舎を建てる上で、すでにこの学年制ありきというつくりをされているかと思うが、どの段階で学年制を校舎に反映させようとしたのか。

A:最初から、学年の議論はあった。義務教育学校の中で最も学年区分で取り入れられたのが4・3・2制で、半分以上の先行校が取り入れていた。子どもたちの肉体的・精神的成長も2年ほど早くなっているというデータもあり、4・3・2制の学習効果も含めて、一番教育効果が高いだろうということが一つの理由である。

4・3・2制といっても、教育をぶつ切りする訳ではなく、1～4年生はこれまでの学級担任制を大事に、8・9年生は、これまでの中学校で行われてきた教科担任制の指導を大事にしながら、その真ん中にある5・6・7年生をポイントに考えた。中1ギャップや、4年生で学習がつかずいたら、その後7年生8年生とつかずいていくというデータもそろっている。一部教科担任制を取り入れながら、9年間の教育で先生方が、1～9年までをしっかりと見取っていく教育を最も進められるのが、4・3・2制であるという結論になった。

校舎については、どれだけの広さで、どれだけのものをつくるか、9年間の子どもが入るので、建て方、基本計画の基本設計が一番悩ましいところだった。この建物自体の基本設計の段階で4・3・2制にふさわしい形の学校づくりをどう設計していくか、という方向になった。基本計画が終わる段階と4・3・2制に持っていく時期が重なって、基本設計、実施設計ということで建物の設計に入っていくというのが流れになる。

Q2:初期の計画の段階から4・3・2制のカリキュラムの組み方を校舎づくりに反映されていたということで、学年の分け方に加えて、王寺町としてのカリキュラム・個性をどのように取り入れられたのか。

3小2中という学校を2つの義務教育学校に再編したとのことだが、以前の体制であれば、真ん中にある小学校が両方のエリアをつなぐ役割をしていたかと思うが、2つの義務教育学校になると、町が南北で分かれてしまうので、そういう危惧はなかったのか。そういう検討はなかったのか。

A:王寺町は、カリキュラムは、基本的には小学校・中学校学習指導要領に準じている。先行して中学校の数学の勉強をしようと考えれば前倒しできるが、転校・転入する子もいるため、不備がないように、従来通りの小学校・中学校のカリキュラムを大事にしている。

開校までに2年間かけて、先生方は、カリキュラム案をつくったが、教科部会というのが王寺町はなかったもので、立ち上げからはじまり、9年間がこんな形につながっていくとつくったカリキュラムが、今各学校に送られているものである。今後、どんどん修正して、熟されていくことによって、弱いところ、または重点的なものが見えてきて、子どもたちの学力につながる形を創造しているところである。小・中の9年間のカリキュラムづくりというのは、まだまだ進行形である。

校区割りについては、本当に悩ましい問題で、王寺町は3小2中という小さな学区なので、最初はそれほど大きな話ではないのではとの考え方だったが、いろいろな案をいただいて、王寺町をどういう形で割っていくか、自治会活動や、まちづくり協議会等々との連携、コミュニティ・スクールを今までやってきたものとの連携をどのように図るか、いろいろな議論をしてきた。そういう中で、今は人口が増えているが、いずれ人口規模は減少になっていくので、その速度を緩める中でも、人口をどう維持を図っていくか、その中に学校をどう位置づけるか、区域をどう割るかという話に進んでいった。学校と地域のつながりは大変大きい。特に小学校校区の中でのコミュニティの形成は長い年月をかけてできあがっていたので、その中でどう再編をするのか、自治連合会等にも話をしていく中で、元の中学校区を基本にやっていくというのが最終的な結論に至った。王寺町は幸い中学校校区で、ある程度のコミュニティ形成ができていたので、義務教育学校の区域割は住民の方に理解を得たかと思う。

Q3:小・中の義務教育学校に、あと幼稚園はどのように位置づけられたのか。

今までの経過の中で小・中合同研修会も何回もあり、王寺町の全教職員で研修をされて、情報を共有されてきたのか。中学校の先生が小学校の子ども、小学校の先生が中学校の子どもの実態を知り合うことというのは行われてきたのか。

A:まずは、義務教育学校にして理解を得ることができるのかという中からのスタートだったので、義務教育学校についての説明を住民の方に説明させていただくところからだった。1割の方はほぼ賛成、1割の方は猛反対、あとの8割の方は不安という中でどちらとも決めがたいというのがスタートだった。そういう中でスタートして、義務教育学校でやると決まった。幼稚園についてどうするか、王寺町は3

園、3小学校、2中学校で、幼稚園については小学校の接続ということ、園区と小学校区とは一緒にやっているとこの話もあつたので、義務教育学校になる方向が決まり出した段階で、園の方に2園化ということの話をさせていただいた。園については3年かけて説明していく方向でいた。元々、園バスを出しての通園なので、多少場所が変わっても義務教育学校との接続を考えた中での2園化は、理解いただけたと思っていたが、コロナ禍での説明会不足もあり、義務教育学校以上に園区の調整というのは大変手間取った。子どもたちにとって、園と学校の接続というのは欠かせない事業だということで、就学前教育、就学してから子どもたちの担任と、子どもたちのしっかりと見守りということを考える中で、3園を2園として再編し、小学校と同じ園区として4月から進めさせていただいている。

教職員研修は、すべての幼稚園、小学校、中学校の職員を縦に割り、グループ化して研修を行った。テーマは、学校・園の決まり、子どもたちの良さ・学校の良さ、子どもたちの課題・学校への課題等。

出前授業を始めた当初、中学校の先生が専科指導、小学校に乗り入れをすることを、あまりなかったもので、まず初めに中学校の先生が小学校に何度か足を運ぶことをしよう、出前事業という名前で、計画を立てて、英語、理科、算数を教えに行こう、と関わりを持った。小学校の先生は中学校で何ができるかという時に、テスト1週間前に中学校は補習を行っているので、補習に小学校の先生が参加し、一緒になって教えた。

Q4:先生方が、小学校と中学校両方の免許が必要だと思うのだが、最初から持っていた訳ではなく、どのように取得されたか。先生の確保は。

A:小学校の免許を持っている先生が、出前授業に行っている。文科省も当面の間は、両方持っていないでも義務教育学校に勤められると言っている。当面の間は定義はすごくあいまいで、1年か10年か分からない。ただし、片一方しか免許のない中学校の先生は、教える教科が制限されるので、両方免許を持っている先生が有利な形であるため、王寺町は両方免許を取得するための支援事業を立ち上げていて、支援している。中学校の先生が4人、小学校の2種免許を取っていただいた。中学校の免許も1人取っていただいている。両免許は必要なので、人事の面においても、両免許を取得した先生を視野に入れた要望をしている。

Q5:働き方改革をしている中で、両方の免許を持った先生への負担ばかりが増えているように見える。

A:運用については、両免許持っているから、何事もその先生に、ということは避けなければならない。現在6年生は、中学校の先生にかなり関わっていただいているので、小学校の先生の空き時間は増えている、逆に中学校の先生の負担が増えることは避けなければいけない。

開校したところで、当面の間は、問題は出てくると思うが、時間が経てば、両方の免許を取得してもらい、また両方の免許を持っている方に来てもらうことで徐々に解消されていくと思う。

一緒になることで、気づきが多い。子どもたちの9年の成長と一緒に喜べるということを感じるところ。今は開校当初でいろいろな調整があり、その分の時間の負担はある。引越等もあり大変だが、一方でゼロから新しい学校をつくっていくのだというモチベーションを先生方も持っている。働き方改革については、課題と思っているので、一緒になった分を、ICTの環境も活用しながら、できるところはスリム化していきたい。現在、会議でペーパーレスを進めていたり、簡単な連絡はクロムブックを活用したりしている。

国のGIGAスクール構想が、一人一台端末ということで、王寺町も環境整備をしていたが、通常1ギガということで校内にネットワーク LANを引いているが、学校が新しくなるということで、町も子どもたちの環境を最善したいということで、10ギガのネットワーク回線を引いている。従来のネットワーク環境でのストレス、全校生徒が使うと止まって動かないというストレスがなくなる環境整備ができたのは、先生方にとっても大きい。持たなくていいストレスの改善は図れたのかと思う。

Q6:義務教育学校になって、最大のメリットは、ここが一番良かったということ子どもと先生方と分けて、教えていただきたい。

A:子どもたちにとっては、1年生から9年生まで一緒に過ごすこと、異学年の中で過ごすことで、社会性や主体性が育つということ、学習面についても学力向上について今後期待できる可能性を秘めていると思う。教員も、子どもたちを広い視点で、ゴールの目標を持って、教員全体で育てていくことは、指導力のスキルアップによりつながると思う。小学校の指導も中学校の指導も幼小の連携を含めて、長いスパンで地域の力も借りながら、学校、地域、家庭が一緒になって子どもたちの力を育てていくことは、義務教育学校の強みだと思う。

Q7:南義務教育学校は、前期と中・後期で校舎が分かれている。校舎配置図を見ていると、既存の学校をそのまま使っている、なぜ南はこうなったのか教えていただきたい。

A:正直なところ、南も一体型でやりたかった。学校をつくるとなると、それなりの予算がかかる。南については、築30年の鉄筋の校舎で、まだ使用可能であり、使える施設を使っていく施設分離型を当時は選択した。父兄や議会からも施設一体型でなぜしないのだという質問を再三いただいたが、今ある中でできる限りの施設を利用し、施設分離型でできる精一杯の取組をするということで、各教室の施設やネットワーク構想の部分は、北義務教育学校と同じ環境を整えることでスタートしている。30年経った校舎を使うため、主体的に学べる空間づくりをすることは、今の学校では難しいということが施設分離型ではある。そういうものを解消するために、南小学校を6年制を4年制の学校にし、かなり施設内に余裕が出たので、そこをできるだけ子どもたちに開放して、同時に、南中学校については、今まで3年制のところを5年制まで入るので、校舎を増築してゆたかの空間を創出していく中で、子どもたちの学びの環境を整備していくことをした。校舎間に物理的に距離があるので、そのところはネットワーク環境の整備等をするので、子どもたちの離れていることでの気持ちが湧かないようにした。

南小中義務教育学校については、異学年交流が容易にできにくい面があるが、ICT環境を使い、オンラインでやり取りの工夫をしたり、何よりも4年生が最高学年なので、委員会活動から学校全体の活動を中心的に行うことになる。これが主体性や責任感を育てていっている。開校する前に、そのことを意識した教育を先生方にも伝えて、来年からは君らがトップの学年だということでの意識づけをした。今のところ、区切りをしっかりと感じられているというメリットはある。異学年の交流は離れているので、工夫して展開していく事になると思う。

あとは、教科担任制等全て施設一致型も分離型も一緒。

中1ギャップがないが小5ギャップがあるのでは、という話もあるが、精神的には6年生から中1になるよりは、4年生から5年生の方が、柔軟性がある。節目の節が小さくて済むので、思ったよりスムーズに移行できる。

Q8:5年生から中学校と同じ部活に参加されていることか。そこが大きく違うのかと思うので、昨年までの5・6年生と今年の変化がどれくらい違うのか。

地域の方がこの施設をどれくらい利用されているのか、今後利用される予定があるのか。

A:5年生以上は50分授業で、授業時間が5分違うのが大きい。教科担任制で、学級担任以外の先生と話をしたりコミュニケーションを図っている。

希望があれば、5・6年生の部活動の参加をという話もあったが、現在、運動場がないので、陸上部と野球部は県民グラウンドの少し離れたところに練習に行っている。部活動の参加は再度検討していく。地域移行というのもあるので、教育委員会の助言もいただきながら、できるだけ良い形で前に進めていきたいと思っている。

コロナ禍で、地域の方が入るのを少し制約している。小学校であれば1年間で延べ800人くらいの保護者と関わりながら、いろいろな形で学校づくりに来ていただいていた。学習支援や電のこ、糸のこ、ミシン、読み聞かせ等、徐々に広げていこうと思っている。地域交流室では、放課後に寺小屋塾、曜日を分けて毎日宿題のフォローをしてもらっているところに、地域の方が教えに来てもらっている。部活動も放課後や土日も練習をしているので、施設の利用は現在していない。

この施設はきちっとした分類分けをしていて、シャッターを下ろすことで、開校している区域と学校の教育部分と校舎内で明確に分けられる形になっている。地域の方が学校の時間外に入って学校での事業をすることもできるし、今はコロナ禍で地域の方の利用は制限されているが、大階段やランチルームは地域の方がさまざまな取り組みが利用できる場所になればと思い整備している。面積的な規模については、元の3小2中に応じた面積を十分に確保することを1つの基準として施設整備したので、その中で不足は出てきていない。

Q9:義務教育学校にする初期の段階で賛否両論があって、具体的にどのような賛成や反対があったのか。

A:賛成の意見としては、王寺小が147年の学校というのもあって、校舎も古く、築60年を超える校舎だったので、良い学校を早く子どもたちに提供してあげて欲しい。トイレするのも嫌、使えない。学校を考えてくれるなら、全て任せる。先行校の事例を考えて良い学校をつくってあげてほしい。良いものを多くの専門家の意見を聞いてやってくれたらいいからそこは任せるとの意見で、後押ししていただいた。

反対の意見としては、3小2中で何か問題があるのか、問題は全く起こっていないし、PTA と学校の関係も大変スムーズにいていたのに、なぜ今その枠組みを変える必要があるのか。今良い学校なのに、なぜそれを崩すのかという話が1番大きかった。今の伝統をしっかりと受け継ぐことが、諸先輩方の意向を受け継ぐことになるし、みんなの応援もいただけるのに、形を変えていく事に対しての反対があった。住民にとっては、3小2中の学区で家を購入したり、生活をされているので、学校が遠くなることについての猛反対があった。

1つ1つ丁寧に説明ができればよかったのだが、コロナ禍で、不満に対しても丁寧な回答を制限され、十分な説明がなされていないまま今に至った。1割猛反対されていた方のうち、半数以上の方からいろいろ言いたいことがあるが、良い学校ができたという声をいただいている。まだ、説明が出来ていないところがあるので、これからもしっかりと後付けさせていただく必要がある。